ヤマト政権における埋葬施設での赤色顔料の利用形態の起源

○ 河野 丹生（九州産業大学付属九州産業高校）
河野 若葉（福岡県立博多青松高校）

【発表内容の要約 ① 】

古墳が出現する時期に古墳の埋葬施設の中に赤色顔料（朱とベンガラ）を利用する風習があり、ヤマト政権のあった奈良県を中心として日本列島の各地域に広く分布する。従来、これを「朱とベンガラの使い分け」と称し、この由来は北部九州にあると指摘された。しかし、その起源はあいまいで、具体的な時期やルーツまで追究された研究はみられなかった。

これをうけて、『朱の考古学』で市毛勲氏が提唱した大陸由来の「西方系施朱」が伝来する時期以後の墓や古墳での赤色顔料のデータを収集し、その起源に迫った。

◆ 赤色顔料

（対象の時期）

朱
（HgS）

辰砂鉱山（三重県松阪市）

ベンガラ
（Fe_2O_3）

ベンガラ産出地（新潟県津南町：西野摩耶氏より写真提供）

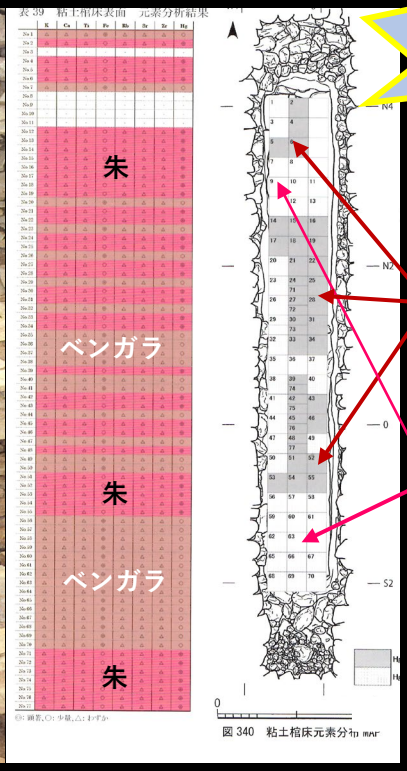
【発表内容の要約 ② 】

検証の結果、弥生時代早期に北部九州（福岡県）の糸島地域に大陸由来の墓の風習（支石墓等）と共に朱とベンガラを同一墓域で利用する風習が出現することが判明した。その後、弥生時代中期前半に入ると、福岡県早良地域の吉武大石遺跡でも確認される。本田光子氏の長年にわたる全国の赤色顔料の分析に基づくと、「北部九州で朱とベンガラの使い分けがあった」とあり、朱とベンガラの利用が北部九州中心に広がったことがわかる。確かに弥生終末期には北部九州だけでなく、丹後でも朱とベンガラの利用の事例はあるが、糸島地域のようにこの風習が弥生終末期でも継続して存在すること、また、朱の産地が弥生早期から終末期まで同一供給とする報告から、朱とベンガラの同一利用のルーツは糸島地域と考えられる。

【ポイント】
朱とベンガラを
同じ遺構で
利用

福岡県糸島市長野宮ノ前遺跡全景（伊都国歴史博物館編 2020を引用）

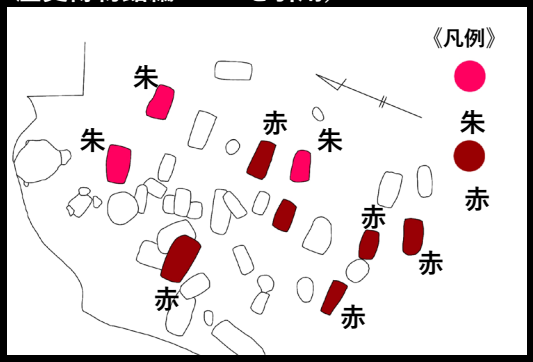
◆ 古墳時代での赤色顔料の同時利用の事例



奈良県黒塚古墳（奥山他 2018を引用・加筆：古墳前期）

Hg（水銀）
朱（顕著）

Hg（水銀）
朱（微弱）



長野宮ノ前遺跡の遺構図（河野他 2019を引用・加筆）

＜主要な引用文献＞
奥山誠義他 2018「黒塚古墳の棺床に分布した赤色顔料の分析」357-358頁『黒塚古墳の研究』八木書店　ほか